
魔法学術でならう処刑者の待遇

八雲 久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法学術でならう処刑者の待遇

【Nコード】

N2908Y

【作者名】

八雲 久

【あらすじ】

300年前に大量虐殺という犯罪を犯し、地獄の監獄に入っていた「魔女」が脱走。一方、偉大な魔法使いを養成する魔法科学学園ではひとりの魔法見習いが憎悪に満ちた復讐劇を企んでいた。「魔女」が学園にかかわることですしずつ歪んだ学園の姿が見えてくる。発見され次第処刑が確定している「魔女」と「天使」になりたい落ちこぼれ魔法見習いが織成す怒濤で波瀾な物語。

- 1 - 1 - 始まり

この世界、ラー・ミュレ。

魔法の根源である精霊の力を借り、繁栄を続けてきた人々。いつの頃からだっただろうか。

精霊界とラー・ミュレをつなぐ魔法陣を生み出し、人間の体に刻みこんだのは。

それによつて、得手不得手はあるものの、大抵の人間は魔法を使うことができた。

しかし、問題も生じてきた。

一部の人間が魔法を使うことに快楽を覚え始めたのだ。

強大な魔法を使い、人を殺すことなど稀に見る光景ではない。

そのため、ラー・ミュレを統制する「死神」が生まれた。

殺害などを犯した者は、ラー・ミュレとは逆の場所にあると言われるシェ・ガールに追放される。

そして、魔法を正しく且有功なものにするために養成する「学園」までもが生まれた。

魔法科学学園。

ラー・ミュレの中心に位置する場所。

ここは、幼くして魔法陣を体に刻まれた人間が通う学校。

自分が専攻する学科、得意とする魔法能力を伸ばし、さらなる繁栄のための力になる。

学校に通う者たちはすべて「魔法見習い」と呼ばれ、卒業まで達すると「魔法使い」に変わる。

呼ばれ方が変わる。

それは世間では「名誉」とされている。

しかしそれは、ラー・ミュレに生まれてきた者の宿命のようなものだった。

決して避けることができない。
逃げることは、一切許されない。
それこそ、まるで監獄のような場所だと言う者もいるくらいに。

？

？

？

月夜が浮かぶ空の下で、刃と刃が交差した。
ひとつは黒い装束を身にまとい、ボロボロのローブのフードを深くかぶった男の刀。

もうひとつは、般若のような面に黒のマントを着た者の身の丈をゆうに超した鎌。

どちらも一步も譲らず拮抗きっこうしているように見える。

だが、刀の扱いに不慣れなのだろう。

男のほうが不利な状況にあった。

「ちよつとは手加減つてものをしてくれないと、本気で俺死んじやうって」

言うがしかし、相手から返事は返ってこない。

それはそうだ。

面をつけた者、「死神」は男を狩るためだけに器械的な動きをしているだけに過ぎない。

すくい上げるようにして首に迫った鎌を体をひねって避ける。

そしてそのまま「死神」との間に距離をあける。

「なあ、このまま討ち合つても仕方ないし、一時休戦にしない？」
そう提案するが、それは愚の骨頂というものだろう。

「死神」は一気に間合いを詰めて鎌を振るう。

男はそれを刀で受け止める。

「やっぱ、ダメ？」

首をかしげて問う。

「処刑……する……」

そこで初めて「死神」が喋る。

しかし、それは声というよりはノイズに混じった音声のように思えた。

「まったく、諦めは肝心って言うのに……。仕事熱心すぎでしょ。

ホント、これだけは使いたくなかったなあ」

一人言ちて、男は口元に薄く笑みを浮かべる。

「死神さん。俺のこと、誰だかわかって相手してる？」

「死神」は今度は言葉を返さなかった。

男の手から少しずつ黒々とした煙が立ち上る。

それに気づいた「死神」は咄嗟に後方に飛びずさるうとしたが、それよりも先に男が刀を「死神」の肩に突き刺した。

それにより一瞬だが動きが鈍る。

その隙を逃すことなく今度は男の手から立ち上る煙が「死神」をとらえた。

「俺、魔女なんですよ」

？

？

？

「龍原っ！」

「ご、ごめんなさいっ！」

教師はこめかみに青筋を立てて怒っていた。

少女は少女で勢いがありすぎたのだろう。

頭を下げたと同時に机に額をぶつけた。

すると、どこからともなくすすくと笑い声が上がる。少し恥ずかしそうに俯きながら、少女は額をさすった。

「もう少し集中できんのか、お前は」

「す、すみません……。集中はしていたつもりなのですが……」

「コップの中の水に色をつけるだけが、酸性の泥水にしてどうする

……」

「……すみません」

教師は呆れたように溜息をつく。

未だ処理していない泥水は、机の上に這いつくばり、少しずつ机を溶かしていつている。

「今日の授業はここまで。

たつはらかなで

龍原奏以外のものには満点を、龍原は - 5 点で点数をつけておく。

明日もまた実習テストだ。しっかり復習をしておくように。

特に龍原。わかったな？」

「は、はい……」

ギロリと睨まれ、畏縮しながら小さく返事を返す。

ちょうど授業終了の鐘が鳴り、生徒たちは教室を出ていく。

「奏！」

下を向きながら歩いていった奏に声がかかる。

「奏ちゃん、危ない！」

はっとして奏が前を向いた時には既に遅かった。

メイド服を着た可愛らしい女の子が目の前にいたのだ。

まるで人形のような可愛らしい佇まいをしている。

だが、奏と目が合うと女の子はさっと顔色を変え、手に持っていた箒を奏に向かって振り下ろした。

「きゃーっ！ 見ないで！ 見ないでえ！

あたしはただ掃除をしているだけなの！ だってそういう仕事なんだもの！

仕方ないでしょ！ 仕方ないんだから私を見ないでえっ！」

「ふわあっ！ ご、ごめんなさい！」

ヒステリックに叫び、一方的に奏を箒で殴ると、涙目になりながら走り去って行ってしまった。

「奏！」

「奏ちゃん！」

ふたりの生徒が奏に走り寄る。

「大丈夫？」

「は、はい……。びつくりしました、香菜ちゃん」

香菜ちゃんと呼ばれた少女、武田香菜はむっとした表情をして、メイド服を着た女の子が去った方向をじっとにらむ。

「まったく。さっさと直してもらわないと困るわね。」

人と目が合っただけで暴力を振るいながらヒステリックに叫んで去っていく掃除機なんて……」

そう。

先ほどの女の子は学園内の掃除をする自動機械人形型掃除機なのだ。

見た目も人間に似せて作られたため、ぱっと見ただけでは普通の人間と区別がつかない。

一層人間に近づけたいという製作者側からの意見で、話す機能も性格もあるのだが……。

昔はとてもおとなしく、熱心に掃除をする女の子だったのだが、ある日を境に目が合った生徒を箒で殴りつけヒステリックに叫ぶ性格に変わってしまったのだ。

被害にあった生徒は10や20の数では収まらず、苦情も多数ある。

だが彼女を直そうとしても、捕獲の時点で普段にない俊敏な動きで逃走するものだから捕まらず、未だ自動機械人形型掃除機はあのままなのだ。

「奏ちゃん」

口を開いたのは左目に眼帯をした背の高い男、安田土喃やすだつなは奏の首を見ながら首をかしげた。

「包帯とれかけてない？」

問われて奏は首に手を当てた。

香菜もそちらの方を見て、あつと声をあげる。

「本当だわ。貸して、あたしがやってあげるから」

「ありがとう、香菜ちゃん」

さっきの衝撃かどうかはわからないが、香菜は奏の首の外れかけた包帯を直す。

「でも、奏。包帯なんかつけなくてもよくない？ 体の一部に魔法陣があるのなんてみんな一緒だし、奏は単に首にあるっただけなんだから」

「そうかな……？ でも、土喃君は眼帯をつけてるよ？」

「違う違う。これは目の中に魔法陣が浮かんでるのを見ると、やら絡んでくる奴とかやたらビビって話しかけてくれなくなっちゃう奴がいるからつけてるだけ。」

言わばカモフラージュだよ」

「そ、そつか。じゃあ、わたしも。カモフラージュだよ」

「なに、その理由……」

呆れながら香菜は包帯のつけなおしを終える。

「……奏ちゃん」

「ん？」

今度は少し声のトーンを下げて土喃が声をかける。

「奏ちゃんはまだ自分の得意とする魔法を見つけてないだけだから、気にしない方がいいよ。」

落ちこぼれだつてすぐに優等生に変わるから」

先程の授業のことだろう。

小さく笑いながら言うと、奏はぎこちない笑みを浮かべて返す。

それを見た香菜は慌ててフォローに走る。

「そ、そうだよ！ 大丈夫！ 奏はマイペースだから人より得意とする魔法を見つけるのが遅いだけなんだから！」

「う、うん！ わかってるよ、大丈夫」

奏は必死に笑うが、どうしてももうまく笑えず苦笑いになってしまふ。

それに気づいた奏はすぐにうつむく。

「あの……わたし、顔洗ってくるね」

そういうと廊下を走り去ってしまう。

残ったふたりは奏が去った方向を見ていたが、やがて奏の姿が消えると香菜が土喃を睨む。

「さっきの流れで、あれはなかったんじゃない？」

あれ、とは授業の失態のフォーローだろう。

自動機械人形型掃除機の話で奏はそのことをあまり気にした様子ではなかった。

しかし、土喃が話を持ち出したことで、奏は授業終わりの時よりも落ち込んでいた。

それを香菜は怒っているのだろう。

だが土喃は小さく首をかしげ、

「え、ごめん。何のことかわからないや」

その口元に柔らかな弧が描かれていたのを、香菜はしっかりと見ていた。

- 1 - 2 - 処刑者

実際のところ、どうしようということではなかった。

だが、好奇心といえそれは違った。

もともと本気で抜け出そうなどと大それたことは考えていない。

無理な話だ。

地獄の監獄とも呼ばれるシェ・ガールから、ラー・ミュレに行くことなど、不可能。

シェ・ガールにいた同僚とも呼べる処刑者仲間から聞いたことがある。

シェ・ガールから脱獄しようと考えた人間はいくらでもいる。

しかしそれは無謀というもの。

逃げようとしても「死神」に追いつかれ、すぐに殺される。生きていられる時間が短くなるだけだ。

それならここで大人しくして少しでも長く生きる道を選ぶ。

そして最後に、必ずこう言うのだ。

「やめておけ」

ああ。分かっている。

どうせ逃げたところで「死神」に殺されるんだろう。

分かっている、けど……。

行かなければならない気がしたんだ。

？

？

？

「いたたた……。も、もっと優しくしてほしいなあ……」

「そ、そんなこと言われても……できません！」

「あはは。奏さんって不器用なんだね」

「ぶ、不器用で悪かったですね！」

「あつ！ いま、今骨が軋む音がした！ やば、痛い！」

学生寮の奏の部屋。

今。

男は腹の痛みには耐えながら、奏の不器用な治療を受けていた。

しかし奏の治療はどちらかというと痛みを倍増させているだけのものにも見える。

苦勞して巻いた包帯は肉に食い込むほどにきつく縛られていた。

それが余計に男に痛みを与えている。

「と、とりあえず……できました」

「うん。すごく痛い……」

「それは我慢してください。……ここからが本番です」

いきなり真剣な顔をしたかと思うと、奏は男の横腹に両手をかざし、深呼吸をした。

これから治療をかけようというのだ。

しかし、これまでに授業で実習をする度に失敗を繰り返してきた。

やはり病院に連れて行った方がいいのではないだろうか。

一瞬、そう考えたりもしたが、絶対的にそれは無理だろう。

提案を口にしただけでも、いまは温厚に笑っている彼でも自分を殺す勢いで止めるだろう。

理由は簡単。

今、奏が治療を施している男は、シェ・ガールからの脱獄犯であり、300年前に大量虐殺をおこなった罪人であり、指名手配書に載るほどの極悪人であるからだ。

病院で怪我を治すはずが逆に病院に行くことで「死神」に通報され殺されるのがオチだ。

「か、奏さん。あの、放っておいてくれてもいいんだよ。

魔女は自己再生能力が非常に優れているから、他人からの恩恵を

頂かなくても……」

「……………」

「あ、あの……奏さん？」

「……………」

「あの、やめてもいいんだよ？」

治療術って失敗するとかかなり痛みを伴うから、これ以上痛くなる
と逆にショック死しちゃう気が……」

「うるさいです。黙ってください」

「お願い！ 自信がないなら本気でやめてくださいっ！」

そう抗議するが、男はベッドに拘束される形で寝かせられている
ので、身動きが取れない。

一方、奏はしっかりと集中をし始め、少しずつ手に暖かな光が集
まっっていく。

その光がゆつくりとした動きで男の左横腹に移動し始める。

光が血が滲んだ傷口に触れる度に傷口に吸い込まれるようにして
消えていく。

それに連れて傷口も少しずつではあるが消えていく。

が、それも長くは続かなかった。

奏の手から光が唐突に消え失せる。

「はぁ……はぁ……」

治療術はコントロールや集中力が必要不可欠になってくる。

もともとそこまで治療術が上手くない奏にとって、今のが限界な
のだろう。

「でき……た……？」

息が上がリ、今にも失いそうな意識を必死に保っていた。
それを見た男はふっと小さく笑みをこぼす。

「はい。見くびってしまったてすみませんでした。とても上手にでき
ていますよ」

「痛く……ない？」

「ええ、驚くほどに快調です」

それを聞くと安心したのだろう。

奏は静かな眠りに就いた。

「……ありがとうございます。奏さん」

静かな寝息を立てて眠る奏の姿を見ながら、男は感謝の言葉を口にした。

なぜ、指名手配までされている俺なんかを助けたのか。

やはり疑問は消えないままであったが、それはひと眠りした後奏に聞けばいいだろうと考え、そのまま男も目を閉じた。

？

？

？

ことは1時間前に遡る。

昨夜、死神と一戦交えた男は困っていた。

あの後死神をうまく撒けたのはいいのだが、一つ厄介なことが起ったのだ。

黒々とした煙で捕まえたはずの死神。

しかしあの力を使ったのが久しかったからなのか。

完全に死神の動きを捕えられきれていなかったのだ。

そのため死神の鎌が煙の中から男に向かって飛んできた。

反射的に避けることには成功したが、次に死神の肩に刺したはずの刀が飛んできたのだ。

これはさすがに避けきれず、左の横腹に刺さってしまった。

なんとか人通りのない校舎裏に逃げて来れ、朝を迎えることができた。

だが、横腹の傷があまりに深く魔法は使えず、辛うじて動くことはできるが俊敏な動きはできない。

今死神に見つかりでもしたら完全にジ・エンドだ。

男はそんな窮地に立っていた。

その窮地を助けたのは少女だった。

龍原奏。

彼女は今朝、学園の玄関にある掲示板に貼ってあった「死神教戒」しにがみきょうかいから発行された指名手配書を見ていた。

指名手配書に載っている男と目の前にいる男が同一人物であることぐらいは気づいていただろう。

顔を変えているならまだしも、していなかったのだから。

しかし奏は自ら男を助け、自分の部屋に連れ帰ると治療を施したのだ。

男はそれに疑問を持っていたのだ。

？

？

？

意識が浮上してゆつくりと目を開けると、部屋の中は真っ赤に染まっていた。

「あ、起きましたか？」

上半身を起してきた男に気づいた奏は男に近づいた。

「よく眠っていましたね」

「うん、そうみたい。……奏さん、体の方は大丈夫？」

「はい。ひと眠りしたらすっかり疲れが取れました。あなたの方は？」

「俺も大丈夫」

そう返すと、やはり心配だったのだろう。

奏の表情から緊張が抜けた。

「奏さん。ひとつ聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「は、はい……」

何を聞かれるのかと少し身構えた様子だ。

「どうして俺を助けたの？」

奏は一瞬きよとした表情をした。

まるで「1 + 1」の答えを聞いたときのような、本当に単純すぎる質問に気が抜けたようだった。

「そんなの……」

そうつぶやくと、男の頭を引つ叩く。

「そんなの、知りません！」

「……は？」

「だから、分かりません！」

どうして自分が脱獄犯なんか助けたのかは分からないんです！

……でも、どうしてもほっとけなかったんです。

あな時のあなたは今にも死にそうで、でも、心では生きたいって訴えているような目をしていて……。

分からないけど、そんな気がして……」

曖昧な答えに男はくすつと笑った。

「……そっか」

小さくつぶやくと、奏も安心したのかほつと一息吐く。

それからすぐに表情を引き締め、どこか不安そうな眼差しで男をみつめる。

「わたしもひとつ、聞きたいことがあるんですが……いいですか？」

「俺が怒らないような質問であれば」

言うとき奏は畏縮してしまった。

それを見て男はくすりと笑みをこぼす。

「ごめん。冗談だよ。なんでも聞いて」

そう言っても聞きにくいことなのか、奏は視線を宙にさまよわせていた。

それでもやがて小さく口を開く。

「どうして……脱獄をしたんですか？」

男はうーん、と考える素振りをして視線を奏の勉強机の方に向ける。

机の端から今にも落ちそうになっている一枚の紙。
それはどこから手に入れたのだろうか。
男を探す指名手配書だった。

緊急事態発生

300年前魔法使い及び魔法見習い等、約1200人を虐殺したとしてシエ・ガールに送られた「魔女」がラー・ミュレに逃走。
『魔女の容姿は身長175センチ前後、細身。
人間の年齢基準で20代半ば。魔女の年齢基準で700代半ば。』
情報に似た男を発見した場合は「死神教戒」までご連絡を。

とご丁寧に写真付き。

それには男も苦笑せざるをえなかった。

「笑つかもしれないけど……」

そう前置きを置いた後、いくつか間を置いた後に話します。

「ないんだ」

「……はい？」

予想していたものと違ったのだろう。

奏は素っ頓狂な声を出した。

「だから、ないんだよ。理由は。」

シエ・ガールから抜け出すことに成功した前例がないから、挑戦してみたかっただけ」

「それは、つまり……好奇心というものですか？」

「好奇心……、とはまた違うかな？」

でも、脱獄したからなにをするってわけじゃないんだ。

単にあそこから出たくて、ここに来たくて……。

理由はないんだけど……って、変だよ。奏さんの言うとおりただの好奇心かも」

そう言って笑って見せると、奏は首を横に振った。

「変です。でも、違います。……それでもいいと思います」
どこか寂しそうに目を伏せながら呟く。

「自分の本能っていうんですかね？」

あなたはそれに従える強い心を持っているのでしょうか」

「本能に従うことが強いかどうかはわからないんじゃない？」

「いいえ。強いです。」

理性は人間が考える範疇での行動しかできません。

でも本能は、自分が信じることや自分のやりたいことがなんでも好きにできちゃいます。

だからこそ本能に従うのには抵抗があり、恐ろしいんです」

奏が話している間、男はぼかんと口を開けてぼうつとしていた。

奏はそれに気がつくのと、慌てて口を閉じた。

「す、すみません……。なんだか熱く語ってしまいました……」

「いや、別に……。」

でもそういう考え方もあるんだなあって学べたから、逆にありがたい
とうございました」

「え、あ、はい……。どういたしまして……？」

意味がよく分かっておらず、奏は少し困った顔をしている。

それを見てくすくすと笑う男。

奏は「笑わないでください」と恥ずかしそうにつぶやいた。
すると突然奏が思い出したように声をあげた。

「あの、そういえばお名前を聞くのを忘れてました」

「そうだね。言ってなかったなあ」

男は少し考える素振りを見せて結局、

「俺は哭藍^{コウラン}。しばらくの間世話になると思っけど、よろしくね。奏
さん」

と言った。

奏は嬉しそうに、しかし気恥ずかしそうに頬を赤らめながら言っ
た。

「はい、よろしくお願いします。哭藍」

「哭藍っ！！」

奏の悲痛な叫びが部屋中に響き渡った。

「毎日毎日、どうしてじつとしてられないんですかつ！」

その度に怪我を増やして帰ってきて……。

いつか体が穴だらけになって死にますよ！？」

奏が必死になって怒っているのにもかかわらず、哭藍はベッドの上でくすくすと笑っていた。

「ちよつと、哭藍。聞いてるんですか？」

「大丈夫。聞いてるって」

まるで毛を逆立てて威嚇する猫をなだめるように優しい口調で言う。

それにはさすがに呆れたのだろう。

奏は怒鳴る気が失せ、代わりにため息を吐いた。

「もう……いい加減にしてください。」

わたしが学校に行っている間に部屋を抜け出して外に出て、拳句死神に見つかって対峙。

わたしが帰ってくるといつも血まみれで部屋にいて……。

毎回治癒術をかけてぶっ倒れる私の気持ちも考えてください」

「でもそのおかげで大分治癒術は上達したでしょ？」

なんでも前向きに考えるといいよ」

「哭藍！」

哭藍は特に悪びれた様子もなく高らかに笑っている。

「だって暇なんだもん。仕方ないでしょ？」

「仕方なくありません。」

そんなことばかり続けていたら死神に見つかりますよ」

「じゃあ、なにかないの？ ここにいても暇がなくなるようなこと」
そう駄々をこねると、奏は呆れたように溜息を吐いた。

哭藍と奏が会ってから一週間。
魔女の優れた治癒術により左横腹の怪我はすっかり跡形もなく完治していた。

ただし、奏が学校に行っている間、哭藍は部屋を抜け出し学園周りを散歩していたのだ。

そしてその姿を見つけた「死神」と対峙し、毎日怪我をして部屋に帰ってくる。

その度に不慣れな治癒術を奏がかける。

毎日その繰り返しだった。

「じゃあ逆に何がしたいんです？」

哭藍はその言葉を待ってましたと言わんばかりの満面の笑みを浮かべる。

「俺、学校に行きたい！」

無邪気にも哭藍は言う。

それにやはり奏は怒る。

「あなたは自分の状況が把握できていますか！？」

あなたは脱獄犯で、死刑囚で、死神に追われてるんですよ！

学校に行きたいなんて寝言言ってる場合じゃないんです！」

「えー、だってえー」

「だってじゃないです！　だめです、絶対！」

哭藍は子供のようにぶくつと頬をふくらまして奏を睨む。

だが奏はそっぽを向いて決して哭藍の方を向こうともしない。

しかし、それも長くは続かなかった。

奏は何かを思い出したように声を上げる。

哭藍はそれに餌を見つけたサメのごとく身を乗り出し食いつく。

「なに？　どうしたの？」

逆に奏少しづつ視線をそらしていく。

「べ、別に。宿題があるのを思い出しただけですよ」

そう言うが、明らかにその言葉が嘘であるのが丸わかりだ。

「違うでしょ。ホントは俺が学校行けるような提案があるんでしょ？」

ね、ね、教えてよ」

「ち、違います。あ、いえ。違うことはないのですが……」

歯切れの悪い言葉で返す奏に哭藍は首をかしげた。

奏はいくらか悩んだ後窓の外を見る。

釣られて哭藍も窓の方を見るが、あるのは夕刻の赤い空。

「……次の鐘が鳴ったら学科棟へ行きましょう」

それだけ言うと奏は机に向かってノートを広げて何かを書きこみ始めた。

？

？

？

訪れたのは校舎の隣に立っている学科棟。

学園に通っている魔法見習いたちは自身が目指す学科の種類により自分だけの研究室が与えてもらえる場合がある。

例えば「錬金術師」を目指している魔法見習いや「魔術師」を目指している魔法見習いなどにはそういう部屋が与えられる。

奏も学科により自身専用の研究室が与えられているのだ。

奏と哭藍は学科棟の玄関を通り、エスカレーターで5階まで上がると一番端の部屋の中に入った。

学科部屋が与えられる生徒は研究熱心なのだろう。

授業が終わればすぐ部屋に入り、夜中になるまで立てこもる。

そのためここまで誰にも会わずに来れた。

奏の部屋は寮とは違い、広かった。

ただし、壁際には本棚などがあるが、中央はぽっかりと空間が空いている。

「そういえば奏さんが専攻してる学科って、なに？」

「これをかけてみてください」

哭藍の質問をスルーして奏はメガネを差し出した。

「なに、これ？」

「一応「変装メガネ」と名付けています。

これをかけると、メガネのフレームについているちょっとした機能が本来の遺伝子を読み取り、分解して別の遺伝子に作り替えます。つまり本来の顔とはまったく異なる顔になる、ということです。

但し。メガネのレンズを通して視覚的にそう見えるだけで、かけた人間の顔の構造自体は変えていません。

まだ研究中なので未完成で、少し自信がなくて。

それに実験台がいなくて少し困ってたんです。

ということ、早くかけてください」

「俺、実験台……？」

一部腑に落ちない点はあるが、説明されてもいまいちよくわからない。

百聞は一見に如かず。

催促されるままに早くかけたほうがいいだろう。

そう判断した哭藍は躊躇いがちにメガネをかける。

「顔、変わりましたか？」

哭藍自身に異変は感じられないが、奏は納得のいかないような顔で首をかしげる。

「あれ、変わってませんか？」

「あ、いや……そういうわけじゃなくて……」

「なに？」

「……こっちの顔の方がカッコいいなって思っ」

「奏さん。今の発言は俺本気で怒るよ？」

言いながら棚の上に置いてある鏡をのぞいてみる。

そこにいたのは間違いなく哭藍ではない別のだれか。

これには哭藍も感嘆の息を漏らした。

「これすごいね。顔が全然違うよ。イケメン二十面相みたい」

何度もメガネを外したりかけたりを繰り返して顔を比較する。

「それをかければ指名手配犯とバレずに学校に行けると思います」

ただ、と付け加える。

「あの、哭藍。体に異変はありませんか？

気分が優れないとか、どこか痛むとか……」

「うん。全然そんなのないよ」

「それは……よかったです」

「うん……？ これかけるとなんかあるの？」

「はい。」

実はそのメガネ、遺伝子を読み取る機能に人体に悪影響を及ぼす作用のものが含まれているんです。

たとえば、めまいや嘔吐感、頭痛から始まり、どこからともなく血が噴き出したり腕が吹き飛んだり……」

「どんな作用っ！？」

「そのためメガネの精度を調べることが出来なくて……。

でもこれで大丈夫です。ありがとうございます」

「なに。感謝されても全然嬉しくないこの感じ……」

それでも奏はメガネの精度を確かめることができて嬉しそうに笑っていた。

- 1 - 4 - ファルプランの儀式

豚の血を。

紫の芋環オタマキの花弁を。

水晶の欠片からすを。

烏の羽を。

大釜に入れ、ぐつぐつと煮込む。

毒々しい色の液体。

それを。

「うわああああああああっ！！

ごめんなさいごめんなさい！

許して、許してくださいっ！」

「哭藍。これはあなたが言いだしたことです。

最後まで付き合ってくださいます」

「違う！ 俺はそんなこと……言っただけ！

でも違う！ 俺、だって、違うんだよおっ！」

「さあ。口を開けて飲みなさい」

部屋のベッドの上に縛り付けた哭藍の上に跨った奏の表情はこれ以上にない快楽に満たされていた。

奏は片手に握ったコップ内の毒々しい色をした液体を哭藍に飲ませようと口をこじ開けようとする。

しかし哭藍は哭藍で命の危機を感じているのだろう。

身動きが一切取れない状態で必死に抵抗している。

「哭藍。これを飲まない魔法陣を刻むときにすごく痛い思いをするんですよ」

「いい！ 痛い思いしてもいい！

つかそれを飲むと、痛い思いをする前に死ぬ気がするので遠慮します！」

「仕方ないですね。」

口からが嫌ならお腹を切って直接胃に流し込みましょうか」

「いつからそんな残酷な子になったの!？」

俺と会った時はもっとピュアな子だったでしょ!？」

奏は哭藍の言葉を聞いていないようで、どこから取り出したナイフをちらつかせた。

それを見ると哭藍の顔が真っ青に変わっていく。

鋭く光るナイフ。

ひんやりとした刀身が哭藍の腹に当たった。

？

？

？

「オエッ……」

哭藍は小さく嘔吐いた。

「そんなにまずかったですか？」

「……一回飲んでみてから言つてよ」

「わたし昔飲みましたけど、そんな吐きそうになるほどでは……。」

あ、もしかすると分量間違えたかも」

「奏さん。俺を本気で殺す気だったでしょ……。」

かばんを肩から下げた奏はくすくすと笑う。

哭藍は今にも吐きそうな衝動に駆られながらも必死に耐えて歩いていた。

「ところで、ここどこ？」

今奏と哭藍が歩いているのは学科棟の小さな図書室にある扉から螺旋階段をおりた後に続く細く暗い道。

奏が持つ小さな丸い球から発せられる小さな光が唯一の灯り。

「ラー・ミユレの地下と呼ばれています。」

不当なファルブランの儀式が行われる場所ですよ」

「不当……？ ファル……？」

「はい。不当なファルブランの儀式です」

ファルブランとは、魔法陣を体に刻むこと。

つまりその儀式。

魔法陣の紋章を掘った鉄製の印を火で焼きそれを体に当てる。

普通にやれば恐ろしいほどの痛みがあるが、先程の毒々しい色の薬を飲めば、その痛みが和らぐ。

「儀式のことはわかったけど、不当ってのは？」

「普通のファルブランは本家の和式部屋で魔法使いにやってもらうのが正式のものです。

でも、シェ・ガールに送られたことがある人間は印を消されますし、最近では少なくなっていますが、親がファルブランの儀式をすることを許可しない場合は魔法陣がありません。

そういった人間たちはここにきて自分で勝手に印を押すんです。

基本的には親ですが、魔法使いとなった者の許可がないと正当な儀式ではないんです。

ただし、許可といっても勝手にほいほいだしていいものではありません。

そのため不当な儀式がよく行われていた時代もある、と聞いています。

その不当な儀式がおこなわれていた場所がここ、ラー・ミュレの地下です」

もうどれだけ歩いただろうか。

細い一本道を歩き続け、着いた場所は、視界の開けた広い場所。しかし暗いことだけは変わらない。

床には大きな魔法陣が描かれており、その中心に哭藍を座らせる。

「いいですか？ 今から鉄の印を押します」

「痛い？」

「さっき飲んだ薬が効いているはずなので大丈夫でしょう」

かばんの中から鉄の印を取り出し、光を発している丸い球と同じ

ようなものをもう一つ取り出す。

「ねえ。さつきから気になってたんだけど、その丸い球ってなに？」
「これですか？」

これはわたしの自信作でもある灯りになる球です。

この球の中には特殊な粒子が存在するのですが、それが触れ合い擦れ合うことによつて摩擦が生じ、火が起きています。

球の外から見ると非常に小さなものに見えますが、球を割ると大きな炎に変わります。

暗い道などを通る時に、普通の人は炎の魔法を使って灯りを出しますが、わたしはそれができないので灯りを作り出す装置を作りました」

えへん、と少し得意げに胸をそらす。

しかし哭藍は逆に冷めた様子で言う。

「それって魔法が使えないから未だ古い技術に頼ってるってことだよね？」

人々は疾うの昔に技術で何か生み出すことを止め、全てを魔法に頼り切っている世界。

哭藍が言っていることは正しかった。

が、それを笑顔で許せるほどに奏は大人ではなかった。

「哭藍。覚悟してくださいね」

一見笑っているようだが目だけは笑っていない。

奏は力一杯に球を地面に叩きつけて割る。

そこから巨大な炎が噴き出す。

火の中に鉄製の印を突っ込み、焼いていく。

少しずつ赤く染まっていく印を見て、哭藍の顔が引き攣っていく。

「ね、ねえ。奏さん？ そろそろよくない？」

「いいえ。まだですよ。しっかり焼かないと痕が付きませんから。

それに……」

奏は笑いながら哭藍を見据える。

「薬の効果が効いている間は押すつもりはありません」

？

？

？

火に身を焼かれる時間は終了し、哭藍は痛みにも悶えていた。

奏の手加減があつたおかげで薬が切れ始めた頃に押されたので、悶える程度で済んだのだ。

当の奏は少しすつきりとした顔で道具をかばんに直している。

「これで正式に儀式を行った人には劣りますが、魔法が使えるはずです」

「なに？ 正式と不当って魔法に優劣があるの？」

「らしいですよ。わたしもよくは知らないのですが。」

魔法陣を体に刻むとき、ただ印を押すだけのようにも思えますが、その行為自体が精霊界への契約そのものなんです。

精霊たちはわたしたちに術を使えるようにする代わりに、死んだ後の魂をもらう。

印を押すとその契約が交わされるらしいです。

どうして優劣があるのか、詳しくは知りません」

奏はそれだけ言つとそれ以上口を開かなかつた。

しかしすぐに帰ろうというわけでもないようで、その場に腰を下ろす。

しばらく沈黙が続いたが、やがて哭藍がそれを破つた。

「さつきも一度聞いたと思うけど……」

奏は視線だけを哭藍に向ける。

「奏さんはなんの学科を専攻しているの？」

変装メガネを差し出されるときに言つた一言。

その時はスルーされたが、今回は少しの間はあつたものの奏はぽつぽつと話し始める。

「わたしは魔法が得意ではありません。普通の人より数段劣る実力

の持ち主です」

奏と会って一週間余りにもなるが、一度も奏が魔法を使ったところを見たことがない。

日常生活であまり使わないと言っても一度もない、というのには疑問を持つところだ。

「なのでどの学科を専攻しても結果は落ちこぼれになる程度です」

「……つまり？」

「つまり、魔法を使わなくても魔法使いになれる学科は「天使」だけです。

わたしはそれを専攻しています」

天使。

自らが昇天し、神の身代わりになることで人々に加護を与え、ラ
ー・ミュレを守る存在。

その存在は偉大であり、しかし魔法は必要としない。

天使に必要なものは「純粋なココロ」。

天使になれるものは一握りもない程度。500年に一人いれば
十分な存在。

「天使は罪人であろうが人間である限り加護を与えるのが使命です」
「だから俺を助けたの？ ……今も、だから俺のやりたいことをやらせようとしてるわけ？」

威厳を持った態度で哭藍が問うと、奏は押し黙る。

それが答えであるようにも取れたが、哭藍は敢えてそれを肯定とはとらなかった。

「明日にはもう学校には通えるはずですよ」

「え、そうなの？」

「といっても仮ですが。一週間あなたには監視の目がつきます。

監視は哭藍の生活態度や性格、言動、成績、魔術の技量。

全てを見て一定値を超えることができれば正式に入学することができます」

それを聞いた哭藍はにっこりと笑い、「楽しみだなあ」とつぶや

く。

「楽しんでばかりもいられませんよ。」

変装メガネがあるとはいえ、死神が学園の周りをうろつろしてま
す。

気を付けないとばれてしまいますから」

「バレたときはバレたとき。そんなに気を張ってたら逆に気づかれ
ちゃうよ?」

「あなたはもう少し緊張感を持つべきです!」

奏は呆れたように溜息をつくど、かばんを持って立ち上がる。

「帰りましょう。もうすぐで寮の門が閉まってしまいます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2908y/>

魔法学術でならう処刑者の待遇

2011年11月27日13時55分発行